

---

---

## 結 論

### 一国家規模あるいはグローバルな流通にみる モンゴルの文化的指向性—

尾崎 孝宏・風戸 真理

(鹿児島大学法文教育学域・北星学園大学短期大学部)

本書の目的は、主としてモンゴル国と中国内モンゴルにまたがって暮らすモンゴル系の人びとの経済活動、とくに牧畜の文化に根ざしたモノである畜産物の生産・流通・消費に着眼して、モンゴル高原地域における物流システムの特徴とその変化を、国家の体制およびグローバルな経済システムとの関係のなかで検討することにあつた。ただし、執筆者は全て人類学者であり、その中でも多くが牧畜に関わる研究を行ってきた。こうしたバックグラウンドを持つ執筆者たちが、なぜ牧畜社会の経済活動を総体的に議論しようと思ひ立ったのか、まずはこの点について説明したい。

一つは、人類学における牧畜研究がしばしば分類される生業論の特性に由来している。生業論はその字義通り、基本的には生業経済による食料や物資の調達を前提とした議論であるがゆえ、生産・消費、あるいはコミュニティ内での分配に対して議論が集中し、異なる生業に携わる人々との流通などに関わる経済活動はさほど大きな注意を払われていなかったと言わざるを得ない。無論、この傾向はモンゴル牧畜に関する人類学的研究においても例外ではなかった。議論のメインは、いかに家畜を生産し、いかに消費するかであり、流通は生産者によって消費されない生産物の行先、という程度の位置づけであつて、売却後の流通プロセスに関しては等閑視されてきたと言っても過言ではない。

しかし、牧畜はそもそも人類史的に見れば新しい生業である。牧畜が成立した時、採集狩猟は当然ながら先行し、農耕も既に存在していた可

能性が高い〔藤井 1999；平田 2013：439-441〕。そうした環境で成立した牧畜が、流通という選択肢を放棄し自給的な閉じた系へと完全に撤退する可能性は皆無とは言えないが、低いと考えられる。しかも世界的に見れば牧畜民といえども多少なりとも農耕などにも携わっている事例が多い中で、モンゴル系の牧畜民は例外的に牧畜専業的である〔松井 2001：19-25〕。この専業性の高さは、自ら農耕に従事しなくとも農産物を確保できるが故の結果であると考えるのが自然であろう。例えばモンゴルの伝統食の一つとみなされる茶は、南中国で生産されたものを遠路モンゴルまで輸送して消費されてきたが、茶馬貿易は宋代（10世紀以降）から始まっている〔狩野 1963：319〕。すなわち、モンゴルは周囲の農耕社会の存在との関係の中で維持されてきた牧畜文化であると言える。そうしたモンゴル系の牧畜民の経済活動を考える場合、流通を抜きには議論は成立しないというのが本書の主張である。

また第二には、国家の体制およびグローバルな経済システムをモンゴルの畜産物の歴史にどう位置付けるか、という問題の存在である。グローバルな経済システムという、一般には1990年代以降の事象が想起されるだろう〔佐伯 2012：18〕。しかしモンゴルに関して言えば、地域的な差異はあるものの20世紀前半より近代国家への取り込みは始まっており、同時に広域的な経済システムへの接合も行われた。また前述したように、そもそもモンゴルの牧畜は、前近代においても広域的な経済システムや国家体制の中で営まれてきた営為である。さらに、英語のCattle（家牛）という語はCapital（資本）と同じ語源から派生している点を想起すれば〔リフキン 1993：26〕、牧畜はそもそも近代的な経済行為のプロトタイプであったともいえるだろう。その意味で、モンゴルの牧畜社会と国家の体制やグローバルな経済システムとの関係性は現代に限定された問題ではない、という認識が本書のもう一つの背景となっている。

そうした前提の上で本書では、主として社会主義時代から現在までを対象に、貨幣で媒介される交換経済が世界的に拡大してきたプロセス（社会主義期を含めて）の一端として、東北アジア地域における「グ

ローライゼーション」の展開にみられるローカルな特徴を議論した。なお、各論文の内容と位置づけについては、以下の通りである。

本書に収録した論文の着目点は、大まかに言って生産・流通・消費の順番に並んでいる。もちろん、各論文は多かれ少なかれ、上記3要素の複数もしくは全てに関連していることは言うまでもない。なお、本書はその作成プロセスにおいて、各章の執筆者がまとめた原稿に対し、編者が議論の統一性に関する観点などから加筆修正を要求し、執筆者がそれにこたえてリライトするという手順を踏んでいることをここで明記しておきたい。

まず、風戸論文が取り上げたのはゲルの壁や屋根として使用する住居フェルトの生産および原材料となる羊毛の流通である。風戸によれば、住居フェルトの生産方法は1930年代より半機械化がなされ、1950年代に社会主義集団化体制の浸透により羊毛の流通が国家によってコントロールされるとフェルト工場へ回される分量が増えるものの、1990年代の社会主義崩壊後の時期には手作業による住居フェルト生産の復活がみられ、2000年以降になると再び工場生産が増加するという。

その背景にあるのは工場生産と手作業の生産方法の原理的な連続性であり、ゆえに両者の相互補完性が成立しうることになる。しかしながら、モンゴル人が対外的には手製のフェルトのみを「伝統」の位相へ位置づけようとする試みは興味深い。だがそれ以上に、ゲルの居住者たちは、機械製の住居フェルトと手作業で作られたフェルトをその特性に応じて使い分けながら併用している点が注目に値する。彼らは新しくて便利なテクノロジーを生活の便宜に役立てることに長けているのである。なお、原料としての羊毛は清朝時代から域外への交易品であったし、フェルトもモンゴル内部での貢納品としては流通の回路に乗りうる物品であった。その意味で、モンゴルにおけるフェルト生産は、近代における社会主義経済や市場主義経済の浸透による経済活動の変容以前から、羊毛（原毛および製品）流通をめぐるフォーマルな制度の客体であり続けてきたとも言えるだろう。

冨田論文が取り上げた乳製品は、社会主義時代以前には基本的に家庭

内での自足的な消費の対象であり、社会主義時代の国家調達がモンゴルにおける乳利用の変化をもたらす契機となったと考えられる点で、羊毛以上にローカルな生産物であったと言える。また、乳製品の中でまず国家調達の対象となったのは牛乳の脂肪分を原料とするバターであり、ついで脱脂乳から分離されるカゼインであった。ただしその製法はモンゴルの土着的な加熱による脂肪の分離ではなく、遠心分離機を使ったクリーム分離が導入されたという点で、従来の技術との断絶が存在する。それはモンゴル人が遠心分離器による脱脂後の脱脂乳に「シンゲン・スー」（薄い乳）という、従来の製法による脱脂乳（ボルスン・スー）とは異なる語彙を当てたことにも象徴的に示されている。脂っこい食物を好むモンゴルの価値観からすれば、「薄い」という味の表現にはネガティブな意味が込められている。また工業原料としてのカゼインの生産も、このモンゴル人の価値観にそぐわない脱脂乳の用途として導入された。そして社会主義時代にも、モンゴル牧畜民の自家消費用には加熱による脱脂から開始する乳製品の系列が作られ続け、技術と流通経路の併存状態が継続したのである。

社会主義崩壊後、労働の集約化や生産・流通の組織化を必要とするバターやカゼインは生産されなくなったが、遠心分離機は都市郊外の牧畜民が都市部に販売するクリームやチーズを効率的に生産するために利用されはじめ、従来は遠心分離機を使った乳製品が消費される空間ではなかった「域内」としてのモンゴル国内に流通し始めているという。つまり市場経済原理の浸透により、単に乳製品が販売対象となるだけでなく、技術面でも外来技術の導入といった変化が発生しているといえるだろう。

尾崎論文が議論の対象としたのは乳酒であり、カテゴリー的には富田論文の扱った乳製品の一部である。ただし、乳酒はそもそもモンゴル内部でも生産地域が限定される、ローカリティの強い乳製品であった。また乳酒を含む乳製品全般が、近代以前には域外への流通の対象ではなく、モンゴル域内でも狭い空間的範囲内で生産から消費までが完結する産物であったことが想像される。そうした乳酒の中で、モンゴル国では

醸造酒に属する馬乳酒だけが二重の意味で「動く」きっかけを与えられた。一つは生産地域の拡大であり、この背景には国家儀礼としてのナーダムが全行政単位で実施されたことと関連が深い。実際、現在でも生産が盛んでない地域の特徴として、ナーダム終了後に馬乳酒の生産が終了する傾向が見られる。もう一つは旧来からの生産地に見られる特徴としての、販売目的での外部への流通の開始である。ただし流通先の外部とはモンゴル国内の都市部であり、社会主義期に進められた都市化、従来輸送が困難だった馬乳酒の輸送を可能にした協同組合の存在などが背景として挙げられる。一方内モンゴルにおいては歴史的要因により、生産地域の拡大はみられず、また都市化の進行も相対的に遅れたままで市場経済に移行したため、馬乳酒の流通においては全国展開はなされなかった。

その後市場経済の浸透により、モンゴル国でも内モンゴルでも、郊外の牧畜民にとって馬乳酒は貴重な収入源として販売・流通の対象となっており、その背景には通信・輸送手段の「利便化」や購買層としての都市居住者の存在がある。また製造法等に関しては雇用労働力や生産機械の導入、冷凍庫による長期保存などといった変化が内モンゴルでは見られるが、基本的な生産技術に関しては大きな変化は見いだせない。なお、蒸留酒に関しては現在に至るまで生産地域の拡大も、販売・流通も発生しておらず、その差異をもたらした原因としては馬乳酒の薬効や、儀礼食としての機能が推測される。つまり都市人口という潜在的な購買層の出現だけではなく、実際の購入動機が存在し、さらに継続的销售を可能とする流通体制の確立が揃って、それまで販売されてこなかった乳製品の商品としての流通が開始するのである。

寺尾論文は、モンゴル国内あるいはモンゴル国と隣国との間で流通、つまり物資や人の移動を担う長距離ドライバーに焦点を当てている。社会主義時代、流通は基本的に公的セクターが直接管理しており、バスや飛行機の乗客が手荷物として私的に流通へ関与することがあったにせよ、その運行そのものは計画経済体制から自由な存在ではなかった。一方で現状は、行政系統に沿った首都＝県中心地、あるいは県中心地＝郡

中心地の流通は恒常的に、公共交通機関としての体裁を取りつつ運行されているのに対し、郡中心地から首都への流通は公共機関である「首都間旅客輸送」の運行として実施されている地域が普遍的に存在するわけではなく、往々にして運転手個人の生活設計や才覚、そして所有する車種や車齢に依存したインフォーマルな運行によって担われている。これらは季節のない単発的であり、需要の見込める場合には国境への流通も担う一方で、必ずしもすべての運転手が恒常的な運行で安定した収入を目指しているわけではない。

つまり状況は地域社会の需給や運転手のビジョンに依存し、これら個別的事情のバランスの結果として流通は存在しているのである。モンゴルにおける牧畜の戦略には必ずしも専門化や規模の拡大を目指さないタイプが存在することは富田論文が指摘するとおりであるが、こうしたいわばフレキシビリティを活用する生存戦略は、今日のモンゴルにおいては流通においても見出すことが可能であると言えよう。またそれは、モンゴルの人口密度や人口規模と関連を有することは間違いないだろうが、単なる環境決定論ではなく、彼らのリスク分散志向、あるいは環境の激変に対する機動的対応の重視といった文化的志向性もそこには介在していると考えられるべきかも知れない。

堀田論文は、モンゴル国の牧畜民世帯における流入方向としての流通、および消費に焦点を当てて論じたものである。こうした物資は食料や日用品、耐久消費財などが挙げられ、牧畜民の日常生活に欠かせない存在であるが、これらのうち多くは畜産物の売却、もしくは各種補助金等によって得られた現金によって市場から購入されてくる。また社会主義時代に旧ソ連を中心とするコメコン経済圏から多様な工業製品が牧畜民世帯へもたらされ、彼らの物質文化に大きな変化がもたらされた。また、1990年代初頭の社会主義体制の崩壊後、モンゴル国がグローバルな資本主義経済に接合されると、牧畜民世帯におけるモノは一層多様となった。

ただし、少なくとも都市から離れた遠隔地に居住する遊牧志向型の牧畜民の事例に関する限り、彼らの世帯内に存在するモノは必ずしも自身

が直接市場から購入・交換によって調達したものとは限らず、贈与・譲与（27.6%）、作製・転用（24.8%）さらには借用・混入（12.6%）に由来しているものが少なからず存在している。無論、贈与・譲与されたものや借用・混入されたモノの起源をたどれば多くが市場に到達するわけであるが、それでも彼らはこうした経路を通じて市場の距離を保っているのだと理解しうる。さらに、モノの貸借による循環は世帯間において頻繁に行われており、これはモノの排他的な独占を伴わない消費のプロセスであると解釈しうる。彼らはこうした、旧来からの文化的装置の継続的利用により、市場やグローバルな経済システムに過剰にさらされることなく、低コストで必要な効能を手に入れることで生存を容易にしているのである。

これらの論文を通して本書が明らかにしたことは、以下の通りにまとめられる。まず、モンゴルにおいては基本的に、時代を下るにつれて流通の対象となる畜産物の種類が増加し、またモンゴルへ流入する物資の品目数および絶対量が増加している傾向が見られる。またこの増加プロセスは、社会主義体制の導入や市場経済の浸透などといったイベントを画期として、非連続的な変化を遂げてきたといえる。

ただし唯一の例外を挙げるとすればモンゴル国における家畜（生体および肉）であり、1990年代以降の市場経済の浸透と入れ替わるように流通の国内化が進行する。家畜は前近代のモンゴルにおいてほぼ貨幣と同義であったし、社会主義体制下での旧ソ連との貿易も実質的にはバーター取引であり、その意味では家畜はすぐれて貨幣的な存在であり続けてきたといえよう。その家畜の持っていた貨幣的な機能が1990年代以降に後退した理由は2つあるだろう。一つには貨幣で媒介される交換経済が浸透した結果、家畜の貨幣的機能が狭義の貨幣に取って代わられたことが考えられる。逆に言えば、社会主義体制下でも労働者の賃金などの形で貨幣の浸透は見られ、貨幣で媒介される交換経済がモンゴル牧畜社会に出現した意義は大きいものの、その一方で社会全体の家畜本位制的性格に大きな変化は見られなかったと言えるだろう。

もう一つの理由は、肉は国境を越えてグローバルには流通しにくい、

という商品特性である。現代の肉の輸出入においては、2国間での家畜衛生条件の締結が必須である。だがモンゴル国は口蹄疫という家畜感染症が頻発しており、日本など多くの国と偶蹄目（ヒツジ、ウシなど）の生肉に関する家畜衛生条件は締結されていない。ロシアは社会主義時代にモンゴルから大量に肉を輸入してきた実績があるという歴史的経緯や肉不足を背景に現在でも生肉（家畜生体を含む）の輸入をしているが、モンゴル国から中国への肉の輸出は2015年に加熱処理された肉に限って実現したばかりである。もちろん内モンゴルにおける肉も同様の問題を抱えてはいるが、中国という巨大市場の存在ゆえに現状では問題が顕在化していない。

それでは、現在のモンゴル国はグローバルな市場に何を流通させているのかという問題になるが、それは石炭や銅・鉛などの鉱産物であり、また畜産物ではカシミアであり、あるいは労働力としての人そのものであったりする。こうした対象は本書では正面から扱っていないが、おそらくそこにも本書の対象群と同様の文化的分析や解釈の余地が存在するものと思われる。特に毛や労働力というのは、モンゴル牧畜社会からの旧来の輸出品を構成しており、その意味においてもモンゴル文化内で独自の位置付けがなされている可能性は高いと思われる。また鉱産物についても、流通が関わる限り、寺尾論文のような個人に焦点を当てたアプローチでの分析は有効であろう。こうした対象の拡大は今後の課題である。

また本書の成果として、モンゴルにおける「グローバリゼーション」の展開にみられる特徴を挙げることができるだろう。まず貨幣、あるいは広域的な流通による影響を大きく受ける領域と、あまり変化しない領域が存在する点である。あまり変化しない領域としては乳酒の製法や消費の形態が想起できるのに対し、肉や乳製品は比較的大きく影響を受けているといえよう。これは、国家をはじめとする近代的制度がモンゴル牧畜民に対して及ぼす影響力の範囲は総じて拡大している一方で、牧畜民は可能な限り自らの持つ文化的ストックを利用しつつ対応してきた結果であると解釈できるだろう。



さらにいえば、モンゴルの生産・消費・流通のあり方からは、モンゴル人がグローバルな／新しいテクノロジーを積極的に受け入れて、これを彼らなりのやり方で使いこなしてきたことがわかる。その例としてあげられるのは、フェルト生産においてもっとも重要な羊毛の縮絨工程を担う輪転機の導入、モンゴルの乳加工の要である乳から脂肪分を分離する過程を著しく時短した遠心分離器の利用、そして馬乳酒を1000回攪拌するための動力攪拌機の開発、また、運輸においてはラクダや牛車による荷運びから自動車への変化、日常生活においては工業製品の活用、などである。とくに運輸については、トラック運転手たちのもっとも重要な商売道具として自動車とならんで携帯電話が不可欠であることに注目したい。ただし、彼らがテクノロジーや動力機械を取り入れるやり方には、伝統とテクノロジーを併用し、両者を併存させるような器用仕事の側面がみられた。その顕著な例は乳製品の加工にみられる。すなわち彼らは、対外的な流通用には機械で作ったバターを、自家消費用には炭火でじっくりと析出させたクロテットクリームを作ってきたのである。このように、モンゴルの人びとは動力機械やテクノロジーを進んで受け入れ、かつ、これらを伝統的な方法と併用し、ときには両者をミックスしてローカライズしてきたのである。

また貨幣や広域的な流通にもかかわらず、彼らは必ずしも専門化という形で経済効率を追求しない傾向も見て取れる。本書で言及した郊外の牧畜民しかり、運転手しかりである。彼ら自身の意識は定かではないが、フィールド研究者の目から見る限り、彼らは多様なオプションの可能性を否定しないことで来るべきリスクに備えているかのように見える。むしろ専門化の傾向が看取されるのは社会主義集団化期の農牧業協同組合や、内モンゴル郊外の馬乳酒生産者のように「持てる者」の側であるが、それとて完全に一業態に特化することは稀である。この原因として想起されるのはモンゴルの変化しややすい環境（自然環境及び社会環境）、専門化をするには希薄な人口、生計手段の変更を伴う空間的移動（例：都市と草原）の頻繁さなどであろう。これらをさしあたり、「モンゴルの」ないし「移動牧畜民的」と評することはあながち的外れではあるまい。

## 参考文献

- 藤井純夫  
1999 『『群れ単位の家畜化説』—西アジア考古学との照合』『民族学研究』  
64(1) : 28-57。
- 平田昌弘  
2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店。
- 狩野直禎  
1963 「茶馬貿易の終末—雍正時代の茶法の實態をめぐって」『東洋史研究』  
22(3) : 319-339。
- 松井健  
2001 『遊牧という文化』吉川弘文館。
- リフキン、ジェレミー  
1993(1993) 『脱牛肉文明への挑戦—繁栄と健康の神話を撃つ』北濃秋子訳、  
ダイヤモンド社。
- 佐伯啓思  
2012 『経済学の犯罪—稀少性の経済から過剰性の経済へ』講談社。